

日本近代文学会 関西支部 会報 第十号

関西支部事務局 06・8・30

★支部事業 [出版]

日本近代文学会関西支部大阪近代文学
事典編集委員会編
『大阪近代文学事典』和泉書院 ○五年
五月

★支部大会研究発表題目

◎二〇〇五年秋季大会

「11月27日 於・奈良女子大学」

- ・「写生」俳句の側面 「旧派」三森幹雄と「新派」正岡子規の論争から
- 青木亮人（同志社大学大学院）

・大東亜文学者大会の理念と実相

第一回大東亜文学賞受賞作・庄司総一
『陳夫人』を中心として

楠井清文（立命館大学大学院）

（シンポジウム）

〈文学〉はいかに精読しうるか？

『卍』への接近／『卍』からの発信

・司会 日高佳紀・杉田智美

・卍の時代・卍の場所

真銅正宏（同志社大学）

・語り手を眺める

―『卍』における視覚的な快樂―
飯田祐子（神戸女学院大学）

・大正期から昭和期への谷崎の移行について

―『卍』の語りを手がかりに―
金子明雄（日本大学）

◎二〇〇六年春季大会

「6月10日 於・関西学院大学」

（シンポジウム）

戦時下における中国と日本の文学的
通路を考える

―（上海）を視座として―

・司会 大橋毅彦・木田隆文

・武田泰淳『上海の蜩』の諸相
松本陽子（大阪大学大学院）

・堀田善衛と上海―「祖国喪失」と
「無国籍」のあいだで

黒田大河（近畿大学）

・戦時下上海の文壇―雑誌『女声』
とその周辺を中心に―

劉建輝

（国際日本文化研究センター）

★支部大会印象記

二〇〇五年度秋季大会印象記

（午前の部）

十一月二十七日（日）、奈良女子大
学で開催された秋季大会は、好天にも
恵まれ、キャンパス内の紅葉に目を楽
しませながら、午前の発表に臨んだ。
初めの発表は青木亮人氏（同志社大
学院生）による「『写生』俳句の側面
―『旧派』三森幹雄と『新派』正岡子
規の論争から」。余情を重視する「旧
派」の中心的存在三森と、対象の映像
化を主張する子規との論争について、
具体的に句を取り上げて跡付けたもの
で、問題設定も適切であり、話もわか
りやすかった。発表後の質疑の中で、
子規の論と実作との間には齟齬がある
こと、子規の「写生」句は教養がなく
ても作られたので後代に膨大な月並み句
を生み出したこと、子規には俳句と短
歌との質的差異が意識されていなかっ
たことなど、興味深い補足がなされた。
こうした「影」の部分にも言及された
ことで、興行きが増したように思われ
た。

続いて、楠井清文氏（立命館大学
院生）による「大東亜文学者大会の理念
と実相―第一回大東亜文学賞受賞作・
庄司総一『陳夫人』を中心として」。

これも、従来あまり問題にされてこな
かった大東亜文学者大会の実態につ
いて詳細に調査した上で、内地と台湾と
の一体化をテーマとした第一回大東亜
文学賞受賞作『陳夫人』について考察
した、重厚な発表であった。特に、「湾
生」（内地人が台湾に居住し、そこで

生まれた者）のアイデンティティの
問題、言語の問題などを面白く聞いた。
会場から意見が出されたように、戦時
下の言説にはバイアスがかかっている
ので、考察には困難が伴うだろうが、
研究対象として有意義・重要であり、
さらなる研究の進展を願っている。

二本の発表ともに、多大な労力を費や
した実証的研究であり、それぞれ文学
研究の欠落部分を埋める豊かな鉱脈を
探り当てていると思う。従来とは異な
って午前中の発表だったため、来場者
の少なかつたのが惜しまれる。なお、
発表時間比べて資料が多すぎ、また
発表者の見解が口頭でのみ述べられた
ため、理解にややもすれば困難が生じ
がちだった点は、改善の余地があろう。
発表者にとつては資料が多いほうが何
かと安心であろうが、聞く方の身にな
れば、提示資料の精選と、それにわか
りやすいコメントをつけるなどの工夫
をした方が、はるかに好感が持てる。
これから発表される方がご検討いた
ければありがたい。

昼休みには、奈良女子大学に寄贈さ
れた池田小菊（志賀直哉の弟子）関係
資料が附属図書館で展観された。奈良
に因むものであり、眼福を得た方も多
かつたことだろう

（須田千里）

（午後の部）

「シンポジウム 〈文学〉はいかに
精読しうるか―『卍』への接近／『卍』
からの発信」が行われるほぼ満員に
なった会場に、私はあのシンポジウム
「方法の可能性を求めて―『痴人の愛』
を読む」（一九八六年）の再現を期待
する空気を感じた。同じ谷崎作品、今

回のパネリスト・司会者が前回の登壇者と縁の方々々。

先ず、司会の日高氏が、『卍(まんじ)』精説を通して、文化研究等によって相対化されてきた「文学」それ自体の価値を問い直し、有効な研究の方向性を探るといふシンポジウムの趣旨を説明した。

真銅正宏氏(「卍」の時代・卍の場所―一九二〇年代の大坂)は、「卍」が大坂以前のローカル色、大坂の同時代状況を色濃く反映している事実を資料に基づいて指摘し、大坂という異国性を殊更に強調し、文学化したものと結論づけた。また「卍」のローカルな内輪性の魅力と危険性、内輪性の反転としての公共性や社会性が、特定の時代や場所の中で、どれほど広がるのかを谷崎は実証したと述べた。大坂モダニズムに造詣が深い氏ならではの検証で、古い資料の持つ新鮮さと実証の重みを再確認し、訓詁注釈は文学精読の基本だとあらためて認識させられた。

飯田祐子氏(「語り手を眺める―『卍』における視覚的な快楽―)は、谷崎を視覚的な快楽に敏感な作家と捉え、園子が外側から唯一描写される「作者註」の視覚性の強さに注目し、声の聞き手である「作者」は園子の語る姿態をずうっと眺めている、「語りを見る」存在(これが唯一言いたかったこと)であると述べた。聞き手は受動ではなく主体である。氏に期待されたセクシヤリティへの言及はなかったが、男の「作者」に見られることから生じる被害性語る行為に於いて言語的側面からはみ出す身体性等のジェンダー配置に関する指摘があった。が、ここをもっと聞きたかった。

金子明雄氏(「大正期から昭和期への

谷崎の移行について―『卍』の語りを手がかりに―)は、園子の語りの特質は物語世界でのコミュニケーション行為そのものの再現Ⅱ反復にあるとし、大正期の作品との関連性に言及。また「先生」のポジションが余分な情報を削ぎ落とし、その語りを純粹に直接的な体験として受容する位置に読者を導く仕掛けであると指摘した。「卍」の語りについてはかつて論じたからか、今回『卍』を大正期の小説表現との連続性の相対把握することが中心だったのは少々残念。氏も指摘した(飯田氏の発表とも重なる)「先生」の位置を足掛かりに、精読して欲しかった。

文学精読という課題に肉薄できたかどうか。また「大坂弁」の問題も置き去りにされた。相対化しあう標準語先生と大坂弁語り手の問題から意見が地域差、性差、語りの視点から意見が聞きたかった。後半の討議に一時間半近く取ったことで議論が深まってよかった。どういう訳か真銅さんの大坂弁の語り口が耳に残った。大坂弁の発表を聴きながらどこまでが本当なんだろうと素直に考えていた。それはたんに言葉のせいなのか。(明里千草)

二〇〇六年度春季大会印象記

今回のシンポジウムのテーマは、「戦時下における中国と日本の文学的通路を考える―(上海)を視座として―」というもので、民族や文化の雑居的交錯の場としての戦時下の上海が文学者の意識にどんなゆきざりをかけていったのか、と言ふ問題を中心に検証、議論しようというものであった。以下、簡単に印象を述べる。

松本陽子氏は「武田泰淳『上海の蜚』の諸相」という表題のもと、「上海の蜚」のテクストを精緻に読み込んだ上で、泰淳にとつての上海体験の意味を探ろうとされた。氏は、泰淳が中国へのキリスト教の浸透力の強さに対して深い認識を持つことによつて、中国及び中国人をよりの確に理解していたこと、また泰淳が中国と日本、東洋と西洋、西洋化された中国と日本を設定した中国といった多様な対立軸を固定することで新たな上海の相を浮かび上がらせたことを指摘した。よく整理された発表で、論旨も明快であったが、中国の内なる西洋に対する批判的視点は泰淳になかったのか若干の疑問が残ることと、「月光都市」など戦後の作品群と七十年代に書かれた「上海の蜚」との関係、すなわち三十年を隔てた作品の間で継承されたものと変容したものについての氏の見解を聞きたいと思つた。

次に、黒田大河氏は「堀田善衛と上海―『祖国喪失』と『無国籍』のあいだで―」と題して、堀田が「祖国喪失」と「歯車」を書くことによつて、祖国を喪失した人たちの形象を通して「国家」と「故郷」が相互に相対化されていく様相を明らかにし、堀田の思想の原点としての「上海」という場の特異性を浮き彫りにされた。堀田の横光利一受容の問題や、「広場の孤独」との関連など、広く多様な氏の問題意識が発表を射程の深いものにしていった。ただ、氏は時代の激変のなかで堀田の立場に揺れが見られることを指摘し、堀田は「祖国」といふ要求さか手垢がついた言葉に新たな内実を求めようとしていた、と論じられたが、結局新たな内実がどのような形で獲得されたのか

については言及されなかったし、「歯車」において歴史の渦に飲み込まれていった表現者たちへのオマージュが見られるとされた点についても異論の余地があるかもしれないと思つた。

最後の劉建輝氏は「戦時下上海の文壇―雑誌『女声』とその周辺を中心として―」と題して、戦時下の上海で日本および中国に対して複雑なスタンスを取ることによつて独自の位置を保っていた雑誌『女声』の具体相と存在意義を明らかにされた。田村俊子を中心に様々な思想的立場を持つ人々のネットワークの上に成立していたこの雑誌のユニークな内実を着実な資料調査を踏まえて明らかにされており、非常に興味深い発表であった。ただ、田村俊子は帝國的言説を転覆し続けた、と言われたが、この場合の「帝國的言説」とはどのようなことを想定されているのか、もう少し詳細な説明があつてもよかったと思ふ。

三人のパネリストの個々の発表についての印象を述べただけで与えられた字数を超えてしまい、最後のデイスカッションについて全く触れることができなかったことをお詫びして今回の印象記を終えるが、このシンポジウムが今後の戦時下上海の研究を一步も二歩も推し進める機会になったことだけは確信するものである。(梅本宣之)

本大会は、「戦時下における中国と日本の文学的通路を考える―(上海)を視座として―」をテーマとするシンポジウムを中心として開催された。

大橋毅彦氏によるシンポジウムの趣旨説明には、竹内好の問題意識、すなわち、「国民文学論」の一環としての、

近代日本におけるアジアの意味の問いかけを連想させる部分が多々あった。「民族や文化の雑居の交錯の場」としての上海が、自国中心主義思想の支配下の文学者の意識にどんな揺さぶりをかけていくかという問題」、当時の上海で生じた「文化的混血性」という問題を検討しようとする今大会の問題提起は、「民族」を意識しつつも、なお「国民」的な制約を超えざる契機を掴もうとする方向性を示したものである。

松本陽子氏「武田泰淳『上海の蜚』の諸相」は、泰淳最晩年の作品、戦時下の上海体験に基づいて書かれた『上海の蜚』を論じた。「中西融合の光景—漢訳聖書の象徴性—」と「侵入する『黄色い顔をした野蛮人』」との二項目に絞られていた。特に、一項目は、同じく上海における基督教の受容に対する泰淳の関心を示した戦後初期の短編「月光都市」についての松本氏の論文とも、非常に示唆的である。ただ、その分、無視できないはずの『上海の蜚』における僧侶としての「私」の側面についての言及がなかったのが、少し残念である。そして、『上海の蜚』において、戦後初期に発表された一連のいわゆる「上海もの」がいかにか再構成されたかということは、戦後三〇年間近くを経て、泰淳の中国認識とともに、日本に対する現状認識がどのような変容をたどったかあるいははたどらなかつたかを意味しているように思い、私自身の課題であるが、検討すべきであると考える。

ストの変遷に堀田自身の立ち位置の揺れを見つつ、「インターナショナル」超国境からクレオール脱国境の思想まで広がるはずの表象として、堀田における故郷喪失者をとらえた。ちなみに、ほぼ同時期、泰淳は、『女の国籍』（一九五一年）において国籍問題に苛まれる「混血児」女性を描いている。私には、堀田と泰淳とはそれぞれ「祖国喪失者」、「混血児」の表象を通して、竹内好「国民文学論」の限界を問題化しているように思われる。その意味で、「占領下の日本」の消失を契機とした、いわゆる「日本国籍剥奪」など、「国民」の再編成という事態と堀田の「祖国喪失者」表象との関係についても聞きたかった。

劉建輝氏「戦時下上海の文壇—雑誌『女声』とその周辺を中心に—」は、占領下の上海において発行された、日中二人の女性を「主編」、「助編」とする雑誌『女声』についての考察である。二人の女性とは、元社会主義信奉者である田村俊子と元女権運動家である、当時、中国共産党の地下工作者であった関露である。『女声』の若き翻訳家、陳緑妮が日本敗戦後、上海で収監された李香蘭こと山口淑子に差し入れをしたというエピソードも興味深かった。

画家陳抱一の娘である陳緑妮こそ、「女の国籍」のヒロイン、「陸淑華」こと「大和淑子」をはじめ、泰淳の複数の作品に登場した、中日「混血児」女性の原型である。「彼女」は『上海の蜚』にもその姿を見せた。

いささか余談めくが、懇親会場で上映された、大橋氏撮影の「現在の上海」は、今大会の問題を参加者それぞれに改めて認識させたという点で印象的であった。（郭偉）

★研究会紹介

主に関西で行われている研究会について、以下の項目順で紹介いたします。（順不同）

- ①会の名称
- ②代表者または事務局等、連絡先の氏名・住所・電話番号
- ③会希望者のための入会案内
- ④その他注意事項等

①芥川龍之介研究会

③本会は、一九九八年、出身・所属大学の枠を超えて、芥川龍之介とその文学について研究すべく、関西在住の院生・研究生・大学教員を中心に発足されました。現在の例会参加者数は、十五名ほどです。芥川以外の近代作家や、さらに外国文学・比較文学を専門とする方も参加して下さっています。年二回（年末に大学の冬休みと夏休み）、土曜日に大阪市内で「例会」Ⅱ「研究発表会」を開催しています。「例会」は大阪で開いています。そのため、発足当初から数年間は「例会」を春夏秋冬の年四回開き、三年ほど前からは回数や年二回に減らし春と秋に開催していたのですが、地方の大学教員の方も参加しやすいように、「年二回開催」はそのまま「冬休み（十二月か一月）」と夏休み（七月下旬から九月上旬）の開催に変更しました。また、参加者の専門や研究対象の多様化をふまえ、発足主旨の「芥川龍之介とその文学」について、四年ほど前から「芥川龍之介とその文学を中心とした日本の近

現代文学について」と、あまり（芥川にこだわらない）方向に変更しました。なお、現在、「会費」「会場費」の類は頂いておりません。ただ、遠方からご参加いただく場合、交通費は各自で負担下さるようお願いいたします。最後になりましたが、当会では「入会（参加）資格」などは設けておりません。「愛好会」ではなく「研究会」である事をご理解いただければ、基本的にどなたでもご参加いただけます。例会参加希望の方は、事務局宛に「懇親会案内」を送付させていただきます。

④これまでの「発表題目・発表者・会場等」については、当会のホームページ、「国文学」「学界教育界の動向」「文学・語学」「彙報」、「いずみ通信」に「催し・研究会、同人誌などのご案内」欄を参照下さい。ホームページのURLは、http://www.geocities.jp/obend_ryunosuke569/です。メールアドレス・FAX番号をお教え頂ければ、懇親会かFAXで年二回の「例会案内」を送らせて頂きます。なお、当会では、経費を抑えるため例会案内の葉書は送っておりません。

①近代部会

②〒591-0033 大阪市住之江区南港中4-4-1 相愛大学人文学部 日本文化学科合同研究室 鳥井正晴
TEL 06-6625-9900(代)

③漱石の作品を、章を追って丹念に読んでいく輪読会です。

①漱石詩を読む会

②〒563-0833 大阪市東淀川区大隅2

1-218 大阪経済大学人間科学部 田中邦夫研究室 Tel. 06-6328-2431代
③漱石の「漢詩」を、逐一に読む研究会です。

①文学論を読む会

②TEL591-0033 大阪市住之江区南港中4-4-1 相愛大学文学部 日本文化学科合同研究室 鳥井正晴
Tel. 06-6612-6900代
③現在、バフチンを輪読中です。

①三重近代文学研究会

②TEL56-6515 伊勢市倉田山 皇學館大学半田美永研究室
Tel. 0596-216410
③入会費、年会費無料。原則として7月、12月の年2回開催。

①与謝野晶子を学ぶ白桜会

②TEL590-0906 堺市堺区三宝町1-10-1-811 松永直子
Tel. FAX 072-228-3075
③毎月第二水曜日午後二時〜四時 於精華学習ルーム(大阪・難波)
④講師 入江春行先生(講演と学習会があります) 受講料千円。テキストはそのつどプリント配布

★会員の業績

(凡例)
著書名:『』
論文名:『』
掲載誌紙名:『』
注記等:()

※関西支部会員の業績のうち、〇五年四月から〇六年三月までのものを収録した。

※各業績に付した番号のうち、①は単行本、②は雑誌・単行本収録論文、③はその他(研究ノート・書評・口頭発表・項目執筆等)を示す。なお、①は書名・出版社・発行年月の順、②は論文タイトル・掲載誌・発行年月の順で記した。

※掲載誌紙の巻号数は省略し、原則として雑誌は発行月のみ、新聞は発行月日を記した。

※原則として雑誌の編者名・発行書名は等は会員の届出に記載のあるもののみ記した。

※著書名・論文名・掲載誌紙名の用字は、原則として会員届出の記載に拠っている。

※なお、支部事業である『大阪近代文学事典』の項目執筆については、紙幅の関係上、各人の業績一覧から割愛した。

関西支部事業

日本近代文学会関西支部大阪近代文学事典編集委員会編
『大阪近代文学事典』和泉書院〇五年五月
ア行の部

青木亮人

②「正岡子規に寄せられた同時代評」『俳文学研究』〇五年一〇月
②「三森幹雄の集金力」『俳文学研究』〇六年三月
②「(資料紹介)『俳声』総目次」明治の俳諧結社『秋声会』の準機関誌について」『同志社国文学』〇六年三月
③口頭発表「正岡子規の『連想』について」(口頭発表)第五七回俳文学会全国大会 〇五年一〇月
③口頭発表「写生俳句の側面」旧派「三森幹雄と『新派』正岡子規」日本近代文学会関西支部二〇〇五年度秋季大会 〇五年十一月

赤瀬雅子

③「リール・サン・ルイ」『多羅』〇五年四月
③「サン・ミシエル付近」『多羅』〇五年八月
③「パリのサロン」『多羅』〇五年十二月
③口頭発表「ミッテラン図書館の文化的背景」桃山学院大学図書館学研究プロジェクト 〇五年四月九日

荒井真理亜

①「上司小剣文学研究」和泉書院 〇五年一〇月
②「大阪朝日新聞(明治二十五年十一月)文芸記事細目」『千里山文学論集』〇五年九月
②「大阪朝日新聞(明治二十五年十二月)文芸記事細目」『千里山文学論集』〇六年三月
③口頭発表「上司小剣と野村胡堂」関西大学国文学会 〇五年七月

乾口達司

②「花田清輝―形式論理と『古き惨虐性』としての現実」『国文学解釈と鑑賞』〇五年十一月
③口頭発表「抵抗としての批評―田木繁・花田清輝―」〇五年一〇月 主催、田木繁の集い

太田登

②「与謝野寛・晶子論」渡欧体験の文学史的意味」『明治文芸館V』嵯峨野書院 〇五年一〇月
②「編集者としての鉄幹―その詩人意識をめぐって」『与謝野晶子倶楽部』第十七号
③口頭発表「石井勉次郎と戦後歌壇」関西啄木懇話会 〇五年四月
③口頭発表「短歌史における啄木という存在」国際啄木学会 〇六年四月

奥村紀子(菅紀子)

②「V. 特別寄稿「漱石のライバル重見周吉と『日本少年』」『英学史研究』〇五年一〇月
③随想「(続)史跡認定された漱石の下宿」『松山市立子規記念博物館友の会ニュース』〇五年六月
③随想「史跡認定された漱石の下宿」『愛媛日英協会会報』〇五年十一月

カ行の部

川端俊英
①『島崎藤村の人間観』新日本出版社 〇六年三月
②「北条民雄『いのちの初夜』とその周辺」『部落問題研究』〇五年四月

岸本次子

- ② 「崖に立つ孟宗竹に象徴されるもの」『門』の夫婦と日常の過去』『武庫川国文』〇五年六月
- ② 「『明暗』に描かれる指輪の意味―お延の指に輝く指輪を中心に』『かほよとり』〇五年十一月
- ③ 「漱石作品に見る語彙表現の一考察―『門』を中心に』『鳴尾説林』〇六年二月

北野昭彦

- ② 「唐文化的引選と日本古代文学的発展」『西京論壇』〇五年三月
- ③ 書評「霍士富著『九十年代以降の大江健三郎―民話の再生と再建のユートピア―』」『論究日本文学』〇五年十二月
- ③ 「物語の功德―想像力・癒やし・共生―」『りゅうこくブックス』〇五年十二月

木村小夜

- ② 「太宰治『破産』論―敗北の理由―」『叙説』〇六年三月
- ③ 事典項目「江刺昭子」「太田治子」「米谷ふみ子」「坂西志保」「島尾ミホ」
- 「素木シヅ」『日本女性文学大事典』日本図書センター 〇六年一月

工藤哲夫

- ② 「賢治の山男像―典拠の可能性―」『女子大國文』〇五年十一月

國中治

- ① 「三好達治と立原道造―感受性の森―」至文堂 〇五年十一月
- ① 「書く場所への旅―れんが書房新社 〇五年十二月」
- ② 「平戸廉吉―力への有機的凝集』『日

本のアヴァンギャルド』世界思想社 〇五年五月

- ③ 若木を見る老人―幸田露伴『望樹記』を読む』『幫』8号 2005年4月
- ③ 口頭発表「第二次『四季』時代の丸山薫―『一日集』と『蝙蝠館』―」日本現代詩研究者国際ネットワーク研究会 〇五年十二月
- ③ 「第二次『四季』の構想―堀辰雄・一九三七年一月(前篇)―」立原道造記念館 館報』〇五年十二月
- ③ 「第二次『四季』の構想―堀辰雄・一九三七年二月(後篇)―」立原道造記念館 館報』〇六年三月
- ③ 「文芸時評』『詩と思想』〇六年三月

熊谷昭宏

- ② 「『事実』としての『奇』と『危』―江見水蔭の『実地探険』群を手がかりに―」『同志社国文学』〇五年十二月
- ③ 項目執筆「神原泰『未来派研究』」「神原泰『新興芸術の烽火』」「西条八十ほか『噫東京』」「ゲエリソグ著、伊藤武雄訳『海戦』」「吉田謙吉『舞台芸術の手帖』」「Albert Gleizes, Jean Metzinger 著、蘇武緑郎訳『キュービズム』」「柳瀬正夢『柳瀬正夢画集』」「演劇のニューウェーブ」和博文編『日本のアヴァンギャルド』世界思想社 〇五年五月

小林幹也

- ② 「現代のプロレタリア短歌―吉川宏志『海雨』論』『近畿大学日本語日本文学』〇六年三月
- ③ 「時評50/50(短歌時評)―『玲瓏』〇五年五月〜〇六年一月」
- ③ 「品位の無い歌』『現代歌人協会会

報』〇六年三月

サ行の部

佐伯順子

- ② 「人情本にみる『性』」『国文学解釈と鑑賞』〇五年八月
- ② 「性の越境―異性装とジェンダー」『日文研叢書36』〇五年九月
- ③ 「描かれた母と子』『なごみ』〇五年十二月まで毎月一回
- ③ 「近世恋心ともよう』『読売新聞』大阪版、毎月一回
- ③ 対談「絵本からおもちゃ絵へ―近世上方の女の子遊び」(対談・肥田皓三)『肥田せんせいのなにわ学』INAX出版 〇五年六月
- ③ 参加報告「アジアの表象/日本の表象」『2004-2005年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書』〇六年三月
- ③ 口頭発表「映像にみる『母性』の表象―近松門左衛門作品の映画化とフィルム・ノワールの女性像を比較して」日本比較文学会関西支部例会 〇五年七月二三日
- ③ 「明治文学における恋愛」韓国近代文学会コロキウム、韓国外国語大学 〇五年九月二九日
- ③ 「近代化のなかの樋口一葉―女性作家とジェンダー」欧日ジェンダー研究フォーラム、ローマ大学東洋研究学部 〇五年十一月二十五日
- ③ 「明治文学における恋愛観」・「アジアの表象/日本の表象」チュラロンゴン大学 〇五年十一月二三日

清水康次

- ② 「代助の〈まどろみ〉と〈覚醒〉―『それから』に描かれる〈心〉」『光

華日本文学』〇五年一月〇月

- ③ 「『藪の中』と芥川龍之介の文学―語ることと意味づけること―」京都府私立中学高等学校国語科研究会編『国語教育雑誌』〇五年四月

真銅正宏

- ③ 紹介「『パンテオン雑誌』研究会編『パリー一九〇〇年・日本人留学生の交遊』」『国語と国文学』〇五年一月
- ③ 「荷風再生―貴族性と大衆性のはざままで―」『日本近代文学』〇五年一月
- ③ 講演「地歌と谷崎潤一郎」『芹屋市谷崎潤一郎記念館ニュース』〇五年一月
- ③ 書評「大衆文化研究会編『大衆文学の領域』『日本文学』〇五年十一月
- ③ 口頭発表「『卍』の時代・『卍』の場所」シンポジウム「〈文学〉はいかに精読しうるか?」『卍』への接近/『卍』からの発信―日本近代文学会関西支部秋季大会 〇五年十一月
- ③ 「文学にできること―想像力の活性化と事前対応―」『同志社大学ヒューマン・セキユリティ研究センター年報』〇六年三月

鈴木暁世

- ② 「鏡の中の幽霊―『明暗』における〈記憶〉」『阪大近代文学研究』〇六年三月
- ② 「芥川龍之介『母』の〈透ける耳〉描写における漱石の影響―中国特派員体験と聴覚―」『阪大比較文学』〇五年八月

須田千里

- ① 共編『新編 泉鏡花集』別巻1 岩波

- 書店 ○五年十二月
- ① 共著『新編 泉鏡花集』別巻2 岩波書店 ○六年一月
 - ② 「『夢十夜』考説」『文学』○五年九月
 - ③ 「幸田露伴『観画談』『土偶木偶』の材源」『国語国文』○六年一月
 - ④ 「幸田露伴『骨董』の原話」『叙説』○六年三月

夕行の部

- 東口昌央**
- ② 国木田独歩 「『酒中日記』論―〈立身出世〉と〈良妻賢母〉―」『兵庫国漢』○五年三月
 - ③ 「〈感情〉という不可解なもの―高橋和巳『悲の器』論」『立命館文学』○六年三月

- 外村彰**
- ① 共著「岡本かの子」『新しい短歌鑑賞第一巻 与謝野晶子岡本かの子』晃洋書房、○五年五月
 - ② 単著「岡本かの子の小説（ひた）ころ」の形象」おうふう ○五年九月
 - ③ 共著 西尾宣明編『日本語表現法―書く技術・話す技術―』樹村房 ○五年十月
 - ④ 「岡本かの子全集未収録資料紹介―大阪産業大学論集人文科学編」○五年六月
 - ⑤ 「岡本かの子前期短歌の内面表出―『かろきねたみ』から『愛のなやみ』へ―」『立命館文学』○六年一月
 - ⑥ 「岡本かの子『浴身』の自意識像―『われ』と『おのづから』の交感―」『日本芸学』○六年二月
 - ⑦ 「岡本かの子母から子への歌―『浴身』以降―」『ポトナム』○六年三月

- ③ 「執筆ノート 田村修一・外村彰編『井上多喜三郎全集』―『日本近代文学』○五年五月
- ④ 口頭発表「犀星と〈京都〉―庭園観を中心に―」室生犀星学会 於、石川近代文学館 ○五年五月
- ⑤ 口頭発表「岡本かの子『渾沌未分』―『近代』と『生命』の相克―」日本文芸学会 於、二松学舎大学 ○五年七月
- ⑥ 「木乃伊の口紅 売れない作家の夫と売りに出中の妻 田村俊子」上田博編『大正の結婚小説』おうふう ○五年九月
- ⑦ 「かろきねたみ」『赤光』『ポケット顧問』や、此は便利だ』上田博編『明治芸文館V 明治から大正へ』嵯峨野書院 ○五年十月
- ⑧ 「執筆ノート 木股知史・外村彰著『新しい短歌鑑賞 第一巻 与謝野晶子岡本かの子』―『日本近代文学』○五年十月

- 友田義行**
- ③ 口頭発表「風景・記録・寓話―安部公房と勅使河原宏の映画的原点―」キネマ倶楽部 ○五年六月
 - ④ 「占領地での失跡をめぐって―勅使河原宏『サマー・ソルジャー』と安部公房―カルチュラル・タイフーン」○五年七月
 - ⑤ 「風景と身体―安部公房原作脚本／勅使河原宏監督『砂の女』論」日本近代文学会秋季大会 ○五年一〇月

- 鳥井正晴**
- ② 「解説」金正勲翻訳『明暗』○五年七月
 - ③ 「句あるべくも5」鎌倉漱石の会会報『門』○五年一〇月

- ② 「漱石漢詩考（二）―詩思香かに在り―」会報『漱石文学研究』○五年十一月
- ③ 「句あるべくも6」鎌倉漱石の会会報『門』○六年三月
- ④ 「日本近代文学と蟬の声」『毎日新聞（夕刊）』○五年九月九日

夕行の部

- 中村美子**
- ② 「『明暗』における「技巧」（二）―分類と概観―」『解釈』○五年八月
 - ③ 「『千羽鶴』の意義―ゆき子をめぐって―」『国文論叢』○六年三月
 - ④ 注釈「『漱石詩訳注』〔無題〕明治四十三年十月十六日」会報『漱石文学研究』○五年六月
 - ⑤ 注釈「『漱石詩訳注』〔無題〕大正五年十月九日」会報『漱石文学研究』○五年六月

- 生井知子**
- ① 単著「白樺派の作家たち―志賀直哉・有島武郎・武者小路実篤―」和泉書院 ○五年十二月

西尾宣明

- ① 共編著『南島へ南島から―島尾敏雄研究―』和泉書院 ○五年四月
- ② 共編著『論文集 子どもへの視点』聖公会出版 ○五年八月
- ③ 編著『日本語表現法―書く技術・話す技術―』樹村房 ○五年一〇月
- ④ シンポジウム「ユーム・ド・イネーター―島尾敏雄と東北」第十回島尾文学研究会小高大会 ○五年八月
- ⑤ 「執筆ノート『南島へ南島から―島尾敏雄研究―』」『日本近代文学』○五年一〇月

- 西村将洋**
- ① 「星座と言語―天文学の大衆化と野尻抱影」共著『大衆文学の領域』大衆文学研究会 ○五年六月
 - ② 「浪漫派の『ゴルフ』―『日本浪漫派』創刊前夜」『日本近代文学』○五年五月
 - ③ 「美術の眼の革命」『佐久間政一』表里派の芸術―「マリネットイ」電気人形―「エルンスト・トルレル」独逸男ヒンケマン―「村山知義」人間機械―「森口多里」表現主義建築図集―「MAVO染織図案集」和田博文編『日本のアヴァンギャルド』世界思想社 ○五年五月
 - ④ 第11章 近代（風流）の思想圏―西川一草亭と漱石山房における身体感覚―共著『技術と身体―日本「近代化」の思想』ミネルヴァ書房 ○六年三月

- 野田直恵**
- ② 「『家霊』という言霊―岡本かの子『家霊』をめぐって―」『日本言語文化研究』○五年七月

夕行の部

- 半田美永**
- ② 「与謝蕪村と佐藤春夫―子規『俳人蕪村』を媒体として―」『子規研究』○五年九月
 - ③ 「自著紹介『有吉佐和子の世界』」『日本近代文学』○五年五月
 - ④ 「丹羽文雄の出版―文壇的デビュー作『鮎』の彼方に―」『中日新聞』三重総合版 ○五年七月十三日
 - ⑤ 「自著紹介『文人たちの紀伊半島』―近代文学の余波と創造―」『日本近

代文学』○五年一〇月

③「近代文学と熊野学」『いずみ通信』

○五年十一月

③講演「蕪村と佐藤春夫」子規研究会
○五年六月五日

③シンポジウム「丹羽文雄と田村泰次郎」三重大学 ○五年七月十七日

③口頭発表「近代文学と『熊野』の諸問題」三重近代文学研究会 ○五年十一月十九日

日比嘉高

②「大衆の意地悪なのぞき見ー」講談倶楽部」のスポーツ選手モデル小説」『大衆文学の領域』大衆文化研究会 ○五年六月

③口頭発表 "Intertwined Branches: Issei and Japanese Literature"

The 2005 Annual Meeting of the Association for Asian American Studies, Los Angeles, ○五年四月二〇～二四日

③口頭発表「『日本文学』の範囲とは？ー日系アメリカ移民の日本文学から考える」京都教育大学国文学会 ○五年七月三〇日

③口頭発表「サンフランシスコの日本語空間ー世文学の成立基盤を考えるー」マイグレーション研究会 ○五年一〇月一日

③パネル発表「永井荷風『あめりか物語』は『日本文学』か？」日本近代文学会秋季大会 ○五年一〇月二三日

細江光

②「名作鑑賞』となりのトトロ」ー母なる自然とイノセンス」『甲南女子大文学部研究紀要』○六年三月

イ行の部

増田周子

②「雑誌『新文学』（全国書房）の大阪出版時代研究ー大阪作家と編輯者との交流を通してー」『日本近代文学』○五年一〇月

②宇野浩二「さ迷へる蠟燭」の笑いー今井白楊をモチーフとしてー」『笑いと創造第四集』○五年一二月 勉誠出版

③「『あまカラ』細目（一）」関西大学『文学論集』○五年一〇月

③「関西からの文化発信」『いずみ通信』○五年六月

③「第六回徳島隨筆大賞選評」『徳島ペンクラブ選集 PART23』○五年一二月

③「カフェーと文化運動」『PS JOURNAL』○五年

③口頭発表 大阪の近代文学と出版文化 日本近代文学会関西支部春季大会 ○五年六月

③講演 宮本輝と大阪 大阪文学振興会 ○五年一二月

水川布美子

②「川端康成『千羽鶴』の一考察」『神女大國文』○六年三月

峯村至津子

①単著『一葉文学の研究』岩波書店 ○六年三月

③項目執筆「網野菊」「大塚楠緒子」「北田薄氷」「木村曙」「鷹野つき」「中島歌子」『日本女性文学大事典』日本図書センター ○六年一月

宮山昌治

②「佐野天声「大農」の問題系ー明治四十年、演劇改良運動の挫折ー」『日本近代文学』○五年五月

ヤ行の部

山本洋

①共著 秋本守英編『資料と解説 日本文章表現史』○六年一月 日

ワ行の部

渡邊ルリ

②「中島敦『李陵』論」『叙説』○六年三月

和田芳英

②「ロシア文学者、昇曙夢の復権をめざして」『新国語研究』○五年六月

②「ロシア文学者昇曙夢の再評価についての提言」『ロシア語ロシア文学研究』○五年九月

③シンポジウム「昇曙夢の歩んだ道」瀬戸内町立図書館・郷土館主催 ○五年十二月十一日

③「関西奄美会年表（戦後篇）」『関西奄美会第89回総会記念誌』○六年三月

事務局から

○関西支部事務局宛に、会員から二冊の本が寄贈されましたので、ご紹介します。

青木京子『太宰文学の女性像』（平成一八年六月、思文閣出版）

宮園美佳『濛虚集』論考「小説家夏目漱石」の確立」（平成一八年六月、和泉書院）

○維持会費の納入が大変少ない状況です。御協力の程、何卒よろしく願います。

☆関西支部ホームページ

<http://www.5c.biglobe.ne.jp/~kindai>

☆関西支部メールアドレス

kansaisibu@mi.biglobe.ne.jp